

改訂的形而上学と「として問題」

木下頌子 (Shoko Kinoshita)

慶應義塾大学

本発表では、芸術作品の存在論における改訂主義と記述主義の間の方法論的対立を、言語哲学的観点から評価することを目標とする。

現代の形而上学的探究において、「改訂主義」的立場を採用することは一般的である。こうした立場においては、形而上学的探究の結果、われわれの日常的信念に大きく反するような結論が主張されることが認められる。たとえば、T. サイダーは、持続についての「段階説」を擁護し、結果としてカップやロウソクのような個物は一瞬しか存在しないと論じる。この主張は、個物についてのわれわれの常識を大きく改訂するものだろう。芸術作品の存在論的身分をめぐる論争においても、多くの論者は改訂主義的な立場をとる。たとえば、G. カリーによれば、絵画は行為タイプであり、絵の描かれたキャンバスが完全に破壊されても絵画自体は存続する。あるいは、J. ドッドによれば、音楽作品は抽象的タイプであり、その結果作曲家の作曲行為によって創造することができないものである。こうした主張をする改訂主義者たちは、科学的探究によってわれわれの常識的信念が誤りだと判明しうるのと類比的に、芸術作品の形而上学的探究はわれわれが芸術作品について信じていることの大部分を覆すような結論を導きうると考えている。

しかし A. トマソンは、一連の論文において、(少なくとも) 芸術作品の存在論について、カリーやドッドのような改訂主義的立場は方法論的に採用不可能だと批判する。このトマソンの批判は、「絵画」や「音楽作品」といった芸術作品種の種名の指示に関する、言語哲学的考察に基づいている。トマソンによれば、これらの種名はクリプキ・パトナム的な指示の因果説に従って当該の種を指示するが、その際この指示メカニズムに標準的に生じる「として問題」に直面する。これは、単純に因果関係に訴えるだけでは、指示対象が完全に確定しないという問題である。一般に、その解決のために話者が結びつける最低限の記述が必要であると認識されているが (cf. M. Devitt & K. Sterelny)、トマソンは、芸術作品種名に関する「として問題」を解決するためにはわれわれ話者が当該の種についての適応条件と共通適応条件を結びつけている必要があると主張する。そしてトマソンによれば、芸術作品種名の指示がこうした記述によって確定されているために、われわれはわれわれが結びつける記述に反するような改訂的主張は擁護できない。というのも、そうした記述を改訂するような主張は、われわれの芸術作品種名が指示する種についての新たな「発見」ではなく、それらの語の指示を変化させるものに相当してしまうからである。それゆえ、改

訂主義は方法論的に誤っているとトマソンは結論する。

トマソンのこうした記述主義的な議論に対して、ドッドは改訂主義的方法論を維持するために、「として問題」を解決する代替的な指示のメカニズムを提示することを試みている。ドッドが提示するのは、G. エヴァンズが固有名に関して洗練させた指示の因果説を、種名に適用させた理論である。ドッドによれば、この指示の理論に訴えれば、芸術作品種名の指示は、われわれが当該の芸術作品種の存在論的特徴について結びつける記述に訴えなくても確定される。こうしてドッドは、改訂主義的方法論を擁護できると論じる。

本発表では、指示の因果説と「として問題」の関係を明らかにすることで、この論争を評価することを目指す。まず発表者は、ドッドが訴えるエヴァンズ説は、「として問題」を解決することはできず、指示確定のためには種名に結びつけられるなんらかの記述の必要性は否定できないということを主張する。しかしこのことはただちに、トマソンの枠組みの正しさを示すわけではない。他方でトマソンに対しては、「として問題」の考察から、トマソンの考えるほどに強い同一性条件・共適用条件の必要性が出てくるわけではないことを指摘する。以上の作業を通じて、形而上学的探究における意味論的制約に関して洞察を得ることが、本発表の目的である。